

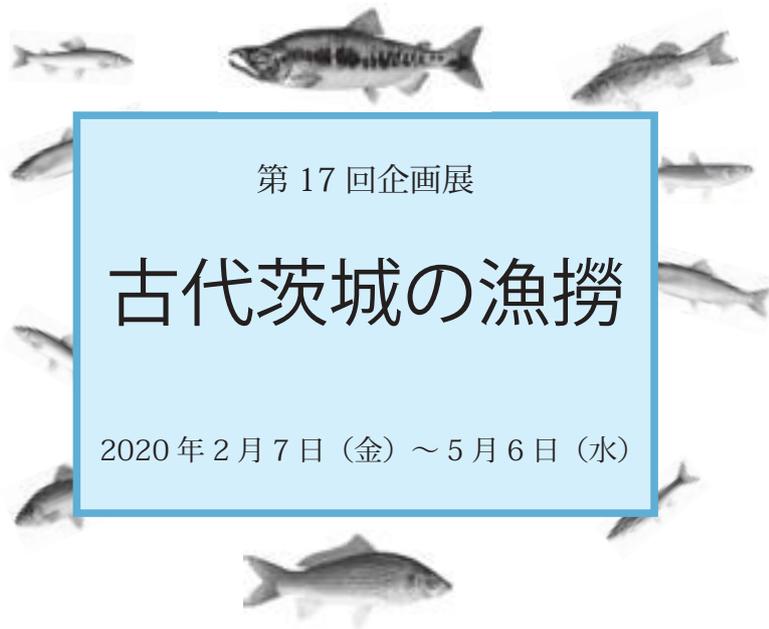
ひたちなか 埋文だより

52



壁画の考古学 2006（平成18）年度からスタートした小中学生考古学体験講座「ふるさと考古学」は、今年度で14回目を迎えました。毎年いろいろな講座を開催していますが、初回から12回目まで毎年実施した講座に「壁画の考古学」があります。「壁画の考古学」は、講師の堀江武史さんに企画していただいた虎塚古墳壁画のレプリカ作りのワークショップです。14年目の今回、「壁画の考古学」を小学生の時に体験した受講生が大学生ボランティアとなって講師を務め、講座が復活しました。完成した作品が上の写真です。「継続は力なり」です。 (2019.8.24)

CONTENTS	第17回企画展 古代茨城の漁撈	
	公開講座「ひたちなか市の考古学」第13回 古代の狩猟と漁撈	
	「私的茨城考古外史—遺跡・人 出会いと別れ」 第2回 発掘三昧への道 序章（瓦吹 堅）	
	資料紹介 磯崎東古墳群出土の玉類 （大賀克彦）	
	横穴墓を歩く⑳ 長岡百穴古墳 （今平利幸）	1ケース・ミュージアム50 瓦に書かれた文字
	ひたちなか市内の発掘調査 2019	ひたちなか市の遺跡⑤改訂版 那珂湊中学区編 2
	虎塚古墳花便り㉔ ウメ	埋文センターの日々 2019 後期 ほか



第 17 回企画展
古代茨城の漁撈
 2020年2月7日(金)～5月6日(水)

第17回企画展
古代茨城の漁撈

日時
 令和2年
 2月7日[金]～5月6日[水]

休館日 月曜日(祝日の場合は翌日)
 観覧時間 午前9時～午後5時(入館は午後4時30分まで)
 入場無料

場所 ひたちなか市埋蔵文化財調査センター
〒312-0011 茨城県ひたちなか市常盤 3400
 ☎029-276-8311

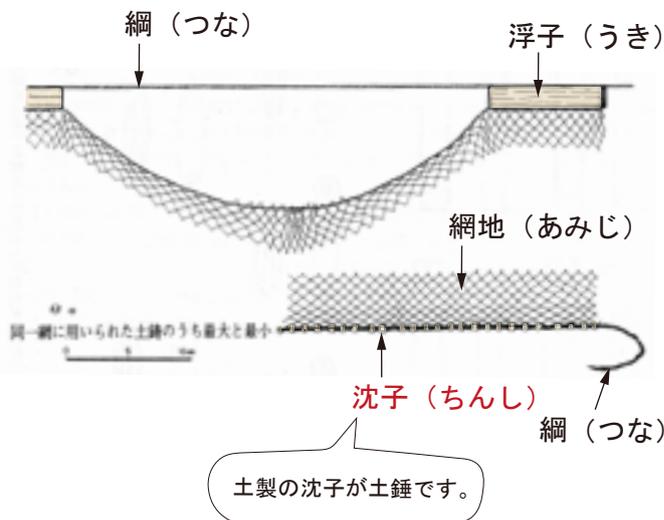
公益財団法人
 ひたちなか市生活文化スポーツ公社

今回の展示は、茨城県内から出土した古代の「土錘」を中心とし、二〇二〇年二月七日(金)から五月六日(水)にかけて開催しました。

土錘から何がわかるか 漁撈は技術の視点から釣漁・網漁・雑漁に分けられますが「安室二〇〇五」、釣漁や雑漁は遺物が残ることが少ないため、古代の実態に迫ることはなかなか難しいといえます。土錘から追究できる部分は「網漁」の一部ですが、海岸付近の土錘出土量は少ないので、「河川・湖沼における土錘を用いた網漁」が考古学研究の中心となります。

小さな刺網 古代の土錘は全国の湖沼・河川域の遺跡から出土し、民俗例などからみて「漁網錘」と考えられています。漁網は江戸時代以後の発達により、多種類の網が生み出されてきました。古代は網を作り上げる麻糸が貴重であり、大規模な網を所有することは困難でした。したがって古代における漁網は、中・小型の魚類を対象とした、丈の低い刺網が主に用いられていたと考えられています。「大沼二〇二二」。刺網は、上部の綱に浮子を結び付け、下部の綱におもりである沈子を通し、その間に網地を付けて構成されます。

土錘の分類 茨城県から出土する土錘は大きさや形が様々で、それらを分類することは難問でした。展示では、漁網に用いられた土錘のまとまりを推測するために、竪穴住居跡の多量出土事例に注目した法量分布図「佐々木



(大沼芳幸 1992 「人はそれでもタンパクシツを欲した」 『滋賀県文化財保護協会紀要』第5号より引用, 加筆)

漁撈の類型

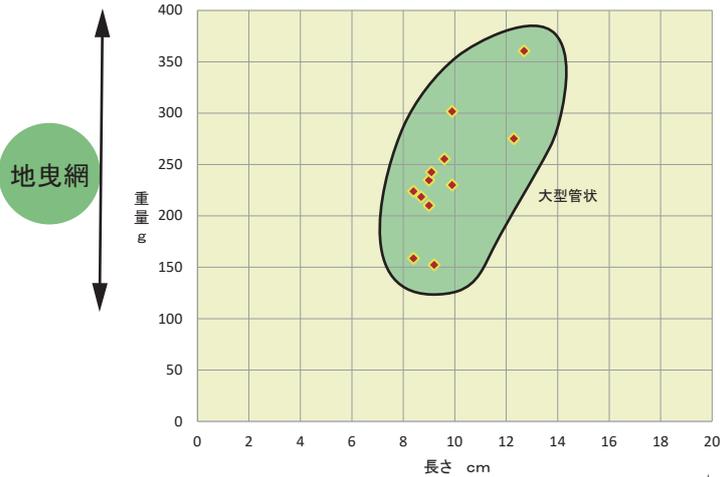
○漁撈技術による類型

- 釣漁
- 網漁
- 雑漁 (ウケ・エリ・ヤナ・鵜飼いなど)

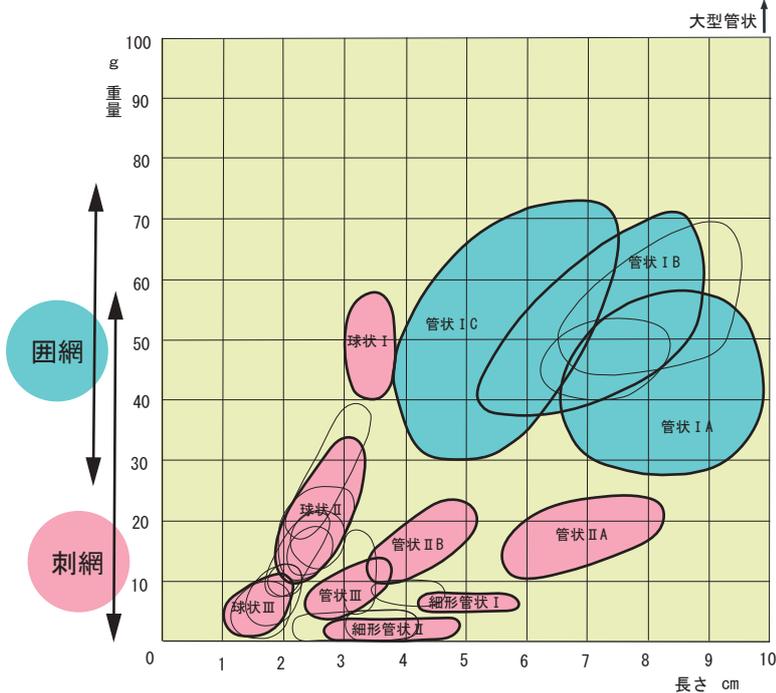
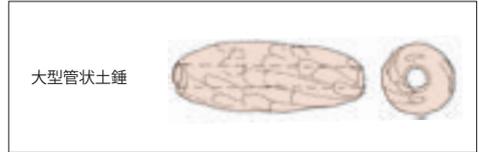
○漁場水域による類型

- 海面漁業 (地先漁業, 沖合漁業, 遠洋漁業など)
- 内水面漁業 (河川漁業, 湖沼漁業, 水田漁撈)

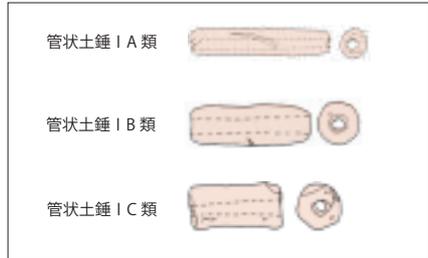
(安室知 2005 『水田漁撈の研究』より)



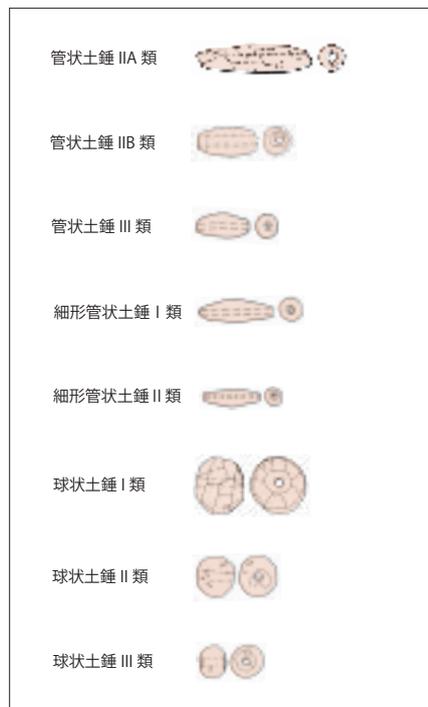
地曳網



罌網



刺網



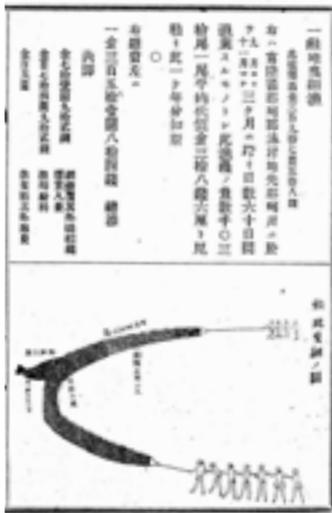
- 基準資料
- 大型管状 : ひたちなか市三反田下高井遺跡204号住居跡 (7世紀後半)
 - 管状 I A類 : 行方市木工台41号住居跡 (8世紀前半)
 - 管状 I B類 : 土浦市うぐいす平遺跡8号住居跡 (8世紀後半)
 - 管状 I C類 : 茨城町宮ヶ崎城跡6号住居跡 (8世紀後半)
 - 管状 II A類 : 土浦市下高津小学校遺跡1号住居跡 (8世紀後半)
 - 管状 II B類 : 結城市下り松遺跡28号住居跡 (11世紀前半)
 - 管状 III類 : つくば市熊の山遺跡205号住居跡 (11世紀前半)
 - 細形管状 I類 : 城里町藤前5号住居跡 (9世紀前半)
 - 細形管状 II類 : 城里町藤前41号住居跡 (9世紀後半)
 - 球状 I類 : 稲敷市業師後遺跡221号住居跡 (8世紀前半)
 - 球状 II類 : 稲敷市業師後遺跡116号住居跡 (8世紀前半)
 - 球状 III類 : 行方市木工台遺跡79号住居跡 (10世紀後半)

茨城県内出土土錘の分類 (各分布域は多量出土事例の法量域を示す)

二〇一六による分類に基づきました。その図によると土錘は形状により管状・細形管状・球状に分かれます。さらに重量により大型・I・II・III類に分かれ、それらは長さの違いによりA・B・C類に分かれます。なお各類型を代表する基準資料の法量域は上図で太線で示される範囲になります。こうして茨城県内から出土した奈良・平安時代土錘の多様性を、とりあえず分類展示することができました。

ひたちなか市の土錘 那珂川下流域下部に位置するひたちなか市では、奈良・平安時代には球状土錘II類が多く用いられたようです。また大型管状土錘や管状土錘I類も用いられました。当地域では古墳時代から奈良時代にかけて、下高井遺跡や船窪・半分山遺跡などから大型管状土錘が多く出土しますので、地曳網漁が行われていたようです。

大型管状土錘について 大型管状土錘は孔の径が大きいので、太い沈子綱を用いたことがわかります。地曳網は網を曳く作業に耐えられる強度を持った太い沈子綱が用いられますから、大型管状土錘は地曳網の



那珂川の地曳網

『湖川沼漁略図並收穫調査』明治13年より、
国立国会図書館近代デジタルライブラリー



那珂川下流域下部 (ひたちなか市三反田より撮影)

沈子になる可能性が高いといえます。太い沈子網を使うと浮力がつくので重い沈子が必要になります。「真鍋二〇二」。そのため地曳網は重い大型管状土錘を用いるのです。

那珂川下流では昭和三七年までサケの地曳網漁が行なわれていましたが、その伝統は古代まで遡るのかもしれませんが。地曳網は古代網漁では最も大規模な漁と考えられますので、豪族の下で行われた可能性があります。

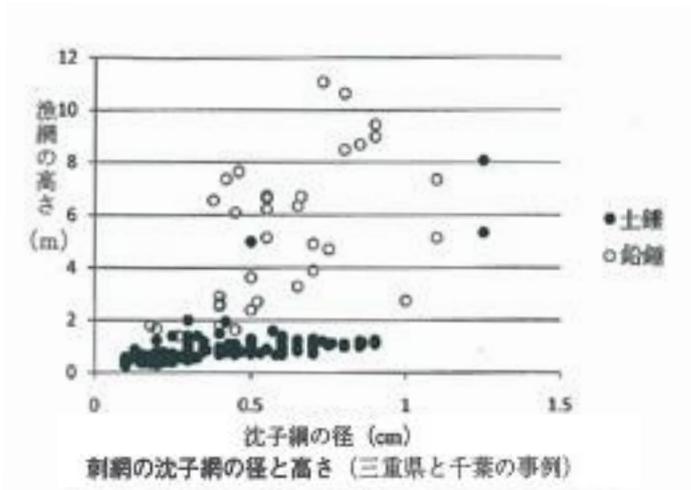
管状土錘ⅠC類について 管状土錘Ⅰ類は、重量・孔径が大型管状土錘より小さく、刺網より大きい土錘です。民俗例を参考にすると、刺網の沈子に用いられた可能性が有るようです。「真鍋二〇一四」。ただし、ひたちなか市から出土する管状土錘ⅠC類は小さめのものが多いので、流し刺網によるサケ漁に用いられたものかもしれません。「酒井一九九六」。那珂川下流域下部では、満潮時にサケが川を遡る習性を利用した流し刺網漁が現在も行われています。

球状土錘について 球状土錘はその形状から、錘同士がぶつかることによる端部の欠損に強いため「大沼一九九〇」、網が揺れる湖沼部や河口部で多く用いられました。また、水底に凹凸がある場所では、網の裾にできる隙間から魚を逃がさないように、長さの短い土錘を多数装着して、水底の地形に沿わせるように用いたことが民俗例で知られています。「真鍋一九九四」。海に近い場所であれば、ボラ・スズキ・ニシ

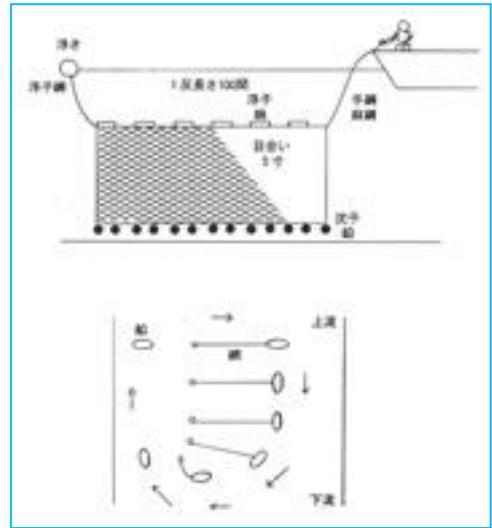
ンのような比較的大型の海水魚をとるために、球状土錘Ⅰ類やⅡ類といった大きくて重い土錘をつけた比較的大きな刺網が用いられたのかもしれない。なお、ひとつの漁網に装着される土錘は大きさにばらつきがあり、たとえば球状土錘Ⅱ類を中心とする刺網の場合には、Ⅰ類やⅢ類も混じることがあったと考えられます。球状土錘Ⅱ類は、孔径が〇・四〜〇・七cmのものが多いので、それを付けた刺網はおおよそ1mほどの高さの刺網だったと推定されます。「真鍋二〇一四」。

茨城県域の八・九世紀の土錘 霞ヶ浦や涸沼などの広い湖沼部の刺網では、球状土錘が用いられました。また北部山間地域の刺網では、河川の静水域で細形管状土錘が用いられました。鬼怒川周辺の細形管状土錘も、河川や沼の静水域で用いられたものでしょう。一方、大型管状土錘や管状土錘Ⅰ類は、中南部湖沼地帯に多く分布しますので、地曳網漁や囲網漁は、おもに湖沼部や大河川の河口部で行われたようです。

茨城県域の一〇・一一世紀の土錘 北部山間地域では、細形管状土錘が久慈川・那珂川の下流域上部から出土します。管状土錘Ⅲ類は那珂川の下流域上部から栃木県域の中流域で一般的に用いられたようです。また鬼怒川周辺の細形管状土錘は、一〇世紀になると霞ヶ浦南部から北浦北部にかけて広まるようです。なお一〇



(真鍋篤行 2014 「遺物による網漁具の復元」『季刊考古学』第 128 号より)



宮城県北上川河口のサケ・マス流し刺網の操業方法
(阿部啓一 1992 『宮城県の伝統的漁具漁法Ⅴ内水面』より)

世紀になると、囲網・地曳網用土錘の分布域が縮小しますが、これは操業する集落が減少したことによるものと思われます。一世紀には管状土錘Ⅰ類が減少しますので、囲網のような中規模な網は、あまり用いられなくなるのかもしれない。

日本第二位の広さを持つ霞ヶ浦や、久慈川・那珂川・鬼怒川といった河川、そして涸沼や牛久沼など、内水面環境に恵まれた古代の茨城を舞台とした古代漁撈の姿を、「土錘」という小さな遺物から明らかにしていくことは、茨城県の考古学研究にとっても重要なことと思われます。茨城県における古代土錘の研究はこれからの深化が期待できる研究分野なのです。

参考文献 安室知二〇〇五「総論「水田漁撈」の提唱」『水田漁撈の研究』大沼芳幸二〇一二「古代近江における職能漁民の動向」『滋賀県文化財保護協会紀要』二五、佐々木義則二〇一六「茨城県における奈良・平安時代漁網錘の分類とその用途」『婆良岐考古』三八、真鍋篤行二〇〇二「三重県阿児町神明のキノシロ網漁について」『民具マンスリー』三四、一二、久保禎子一九九六「木曾川の大網」『宮市博物館だより』二二、大沼芳幸一九九〇「正伝寺南遺跡出土の魚網錘について」『正伝寺南遺跡』真鍋篤行一九九四「弥生時代以降の瀬戸内地方の漁業の発展に関する考古学的考察」『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要』七、真鍋篤行二〇一四「遺物による網漁具の復元」『季刊考古学』二二八、大沼芳幸一九九二「人はそれでもタンパクシツを欲した」『滋賀県文化財保護協会紀要』五、阿部啓一一九九二「宮城県の伝統的漁具漁法Ⅴ内水面」、酒井和夫一九九六「越後のサケ取り漁具と小屋」『蛙・鱒の民俗』

今回の企画展の開催に際し下記の機関からご協力をいただきました。
(50音順、敬称略)

稲敷市歴史民俗資料館、茨城町教育委員会、公益財団法人茨城県教育財団、常総市教育委員会、大子町教育委員会、つくば市教育委員会、土浦市上高津貝塚ふるさと歴史の広場(考古資料館)、行方市教育委員会、常陸大宮市教育委員会、日立市郷土博物館、結城市教育委員会



展示のようす

公開講座「ひたちなか市の考古学」第一三回

古代の狩猟と漁撈

公開講座「ひたちなか市の考古学 第一三回 古代の狩猟と漁撈」は二〇二〇年二月十六日から三月八日の毎週日曜日に開催を予定しました。三名の研究者をお招きし、古代日本の狩猟及び漁撈に関する御研究についてお話しいただく予定でしたが、第三回・第四回の講座は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、残念ながら中止となりました。



月/日	演 題	講 師
2/16 (日)	常陸国風土記にみる 鳥・獣・魚	東邦大学訪問研究員 矢野 徳也 氏
2/23 (日)	茨城県の奈良・平安時代の 網漁	(公財) ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社 佐々木 義則
中止	古代武器研究からみた狩猟	栃木県埋蔵文化財調査センター 津野 仁 氏
中止	水田漁撈と水田狩猟の提唱	神奈川大学 安室 知 氏

東邦大学訪問研究員

矢野 徳也 氏



東邦大学訪問研究員

員や筑波山ジオパーク教育・学術部会副会長などの多彩な肩書を持つ矢野徳也さんは、私たちの埋文センターで開催している小学生と中学生向けの、ふるさと考古学講座でもお世話になっている先生です。ご専門が地質学なので、遺跡出土の石製品の石材観察・同定でもお世話になっています。

今回の公開講座では、矢野さんのライフワーク(?)でもある常陸国風土記についての講義をお願いしました。今回の講座のテーマが「古代の狩猟と漁撈」なので、「常陸国風土記にみる鳥・獣・魚」という題で、常陸国風土記に登場する産物について、いろいろな話をお聞かせいただきました。

低地に鹿がいたという記述は、北海道の湿原にいたエゾシカを思い浮かべるとわかりやすいとか、八世紀にはオオカミがいたとか、昔のコイは細長い形だったとか、腕ほどのアユは本当にいるとか、古代のハスは白い花ではなくて赤い花でレンコンの風味はねっとりしていた、等々、そうなんだ!と思う話題が次々に出てきて、あつという間に一時間半が過ぎていく楽しい講座となりました。

(佐々木義則)

歴史の小窓 その二三

漆で養生した砥石

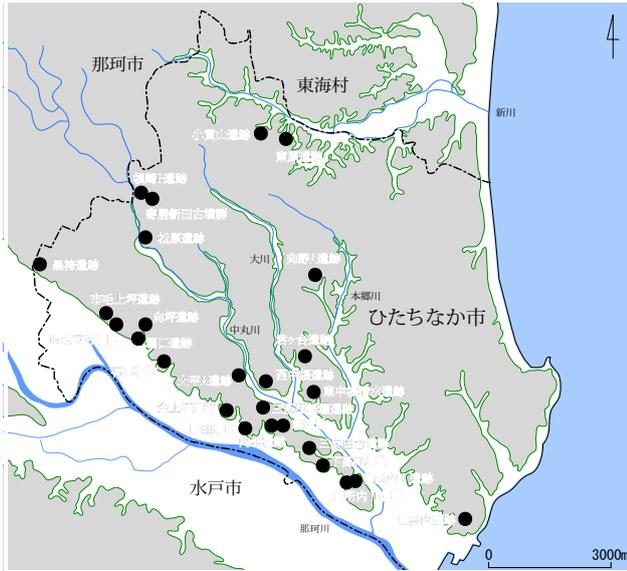


発掘調査報告書を書いた時には不明であったことが、後でわかっていくことがあります。そのひとつに、砥面以外を黒く塗った砥石がありました。この砥石は、ひたちなか市石高遺跡の平安時代の第一五五号住居跡から出土したものです。なぜ黒く塗ってあるのかわかりませんでした。

報告書刊行後しばらくしてから、大工道具の砥石について書かれた本を見ていたところ、砥石の筋などから割れてしまうのを防ぐために、漆を塗って割れを防ぐことをを知り、遺跡から出土した砥石はまさにこれだと思いました。黒く塗った砥石は、割れやすい日立市の結晶片岩製のため、長く大事に使えるよう漆を塗って養生したのでしょうか。きっとこの砥石を用いた人が漆を持っている、砥石を養生したのではないのでしょうか。集落遺跡から時々出土する漆の用途のひとつを教えてください。この砥石は貴重な資料といえるのです。

(佐々木義則)

参考文献 大工道具研究会編「〇二二『大工道具・砥石と研ぎの技法』誠文堂新光社



向野 A 遺跡 7 次調査

むかしの まわたり
向野 A 遺跡は、馬渡埴輪製作遺跡の北およそ 200 m に位置する遺跡です。

2018 年度に試掘調査が実施され、溝跡が 1 条確認されました。この溝跡は、地元で「鎌倉街道」と伝承されていた、細い道に沿うように続いており、その「鎌倉街道」といわれる古道の側溝ではないかと考えられていました。

今回の調査により、この溝跡は深さおよそ 120 cm の北東から南西にのびる、溝であることが分かりました。溝からは「元祐通寶」という、中世に流通していた銅銭が出土しています。この銅銭が出土したことにより、この溝跡が「鎌倉街道」の側溝であるという確証を得ることもでき、大きな発見となりました。

参考文献 飛田英世 2018 「ひたちなか市の鎌倉街道」『常総中世史研究』 第 6 号 茨城大学中世史研究会



調査で確認された中世の側溝跡

二〇一九年度は、ひたちなか市内において、二八件の試掘調査、五件の本調査を実施しました。

根崎 B 遺跡では、弥生時代後期の、底部に木葉痕が残る土器が土坑の中から出土しました。

三反田新堀遺跡では、試掘調査で住居跡二基が確認され、弥生時代中期の土器が多く出土し、その後の本調査では、楕円形をした、弥生時代中期と考えられる住居跡が、確認されました。

堀口遺跡では、約三二〇〇㎡の調査区から、弥生時代、奈良・平安時代の住居跡が三五基確認され、弥生時代後期の十王台式土器や古墳時代の土師器、平安時代の灰釉陶器などが出土しました。

(田中美零)

はじめての経験

四月から、ひたちなか市埋蔵文化財調査センターで働き始めて、一年が経ちました。この一年間は、私にとって初めての経験がたくさんありました。小学生をたくさん引き連れての遺跡の説明。二年前には自分が学生側だった、博物館実習生の指導。学生時代にはできなかった様々な遺跡の発掘調査。仕事をしていく中で、多くの経験をしました。

この様々な経験を積み重ねて、早く職員の初心者マークがとれるように、また一年頑張っていこうと思います。次はどんな経験ができるのか楽しみです。そして、今回は一年の振り返りを書きましたが、次は何を書こうかなと、次号の心配もしております…。

(田中美零)



はじめて入った虎塚古墳石室レプリカ

2019（平成 31）年度市内遺跡調査一覧表

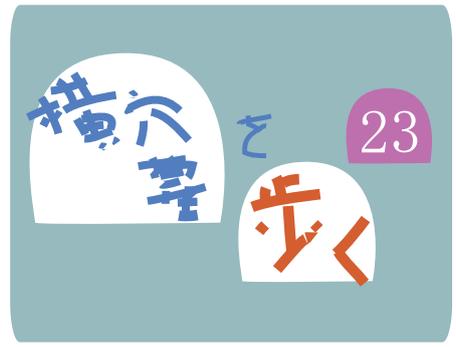
No.	遺跡名	回数	所在地	種別	時期	遺構・遺物
1	おかだいせき 岡田遺跡	36 次	三反田	本調査	4 月	溝 1 条を確認。土師器、須恵器、石器、鉄製品が出土。
2	ほりくちせき 堀口遺跡	30 次	堀口	試掘	4 月	住居跡 2 基(時期不明 2)、溝 1(中世)を確認。縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶器、石器、鉄製品、瓦、銅銭が出土。
3	こしうちいせき 御所内 I 遺跡	2 次	三反田	試掘	4 月	なし
4	にしなかいせき 西中根遺跡	5 次	中根	試掘	5 月	溝 9 条、土坑 1 基を確認(時期不明)。縄文土器、近世の陶器・土器が出土。
5	きみがだいせき 君ヶ台遺跡	14 次	中根	試掘	5 月	住居跡 1 基(古墳 1)を確認。縄文土器、土師器、近世の磁器が出土。
6	ひがしなかねしみずいせき 東中根清水遺跡	5 次	中根	試掘	5 月	なし
7	いしだかいせき 石高遺跡	12 次	武田	試掘	5 月	なし
8	くろぼかいせき 黒袴遺跡	8 次	津田	試掘	6 月	住居跡 1 基(古墳 1)を確認。弥生土器、土師器、石製模造品が出土。
9	ひがしほらいせき 東原遺跡	9 次	高野	試掘	6 月	住居跡 1 基を確認。
10	かねがしなかいせき 金上遺跡	11 次	金上	試掘	6 月	住居跡 1 基(奈良・平安)を確認。土師器、須恵器が出土。
11	いちほしもつほいせき 市毛下坪遺跡	19 次	市毛	試掘	7 月	住居跡 1 基を確認。
12	いちほがかみつほいせき 市毛上坪遺跡	29 次	市毛	試掘	7 月	住居跡 6 基(古墳 4、時期不明 2)を確認。弥生土器、土師器、須恵器、不明鉄製品が出土。
13	しもたかいせき 下高井遺跡	7 次	三反田	本調査	7 月	住居跡 1 基(古墳 1)を確認。縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、石器(石鏃)が出土。
14	うちでいせき 内手遺跡	3 次	三反田	試掘	7 月	住居跡 1 基(時期不明 1)を確認。弥生土器、土師器、須恵器が出土。
15	こしうちいせき 御所内 II 遺跡	5 次	三反田	試掘	7 月	溝 1 条を確認。
16	ねざきひいせき 根崎 B 遺跡	1 次	田彦	試掘	8 月	土坑 2 基(時期不明)を確認。縄文土器、弥生土器、土師器が出土。
17	よりのしんでんこふんぐん 寄居新田古墳群	1 次	田彦	試掘	9 月	溝 2 条を確認。
18	よりのしんでんこふんぐん 寄居新田古墳群	2 次	田彦	試掘	9 月	なし
19	よりのしんでんこふんぐん 寄居新田古墳群	3 次	田彦	試掘	9 月	溝 1 条を確認。
20	おぬまやまいせき 小貴山遺跡	3 次	高野	試掘	9 月	なし
21	まつほらいせき 松原遺跡	7 次	田彦	試掘	10 月	住居跡 4 基(古墳 1、時期不明 3)、土坑 1 基を確認。土師器、鉄滓が出土。
22	みたんだしほりいせき 三反田新堀遺跡	19 次	三反田	試掘	11 月	住居跡 2 基(弥生 1、時期不明 1)、ピット 1 基を確認。弥生土器が出土。
23	よりのしんでんこふんぐん 寄居新田古墳群	4 次	田彦	試掘	11 月	溝 1 条、土坑 1 基、ピット 1 基を確認。
24	みたんだこふんぐん 三反田古墳群	3 次	三反田	試掘	11 月	周溝 2 条を確認。
25	むかいつほいせき 向坪遺跡	6 次	堀口	試掘	12 月	溝 1 条を確認。
26	おおたいらえいせき 大平 A 遺跡	6 次	大平	試掘	12 月	住居跡 1 基、溝跡 1 条を確認。土師器、須恵器が出土。
27	みたんだしほりいせき 三反田新堀遺跡	20 次	三反田	本調査	1 月	住居跡 1 基を確認。弥生土器、土師器、須恵器が出土。
28	ほりくちせき 堀口遺跡	31 次	堀口	試掘	1 月	住居跡 35 基(弥生 6 基、古墳 17 基、奈良・平安 8 基、時期不明 4 基)、溝跡、土坑、ピットを確認。弥生土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、磁器が出土。
29	いちほがかみつほいせき 市毛上坪遺跡	30 次	市毛	本調査	1 月	住居跡 4 基(弥生 1 基、古墳 3 基)、土坑 3 基を確認。弥生土器、土師器が出土。
30	いしだかいせき 石高遺跡	13 次	武田	試掘	1 月	なし
31	はだまいせき 峪遺跡	2 次	三反田	試掘	2 月	なし
32	ほりくちせき 堀口遺跡	32 次	堀口	本調査	2 月	住居跡 2 基(奈良・平安 2 基)を確認。土師器、須恵器、石製品、鉄製品、馬歯が出土。
33	あさいないせき 浅井内遺跡	4 次	浅井内	試掘	3 月	なし
	むかいのえいせき 向野 A 遺跡	7 次	馬渡	本調査	10 月	中世に推定される溝 1 条を確認。縄文土器、古銭(元祐通宝)が出土。



いくつも重なって確認された遺構(堀口遺跡)



現場の作業風景(市毛上坪遺跡)



栃木県宇都宮市
ながおひやくあなこふん
長岡百穴古墳

今平 利幸

(宇都宮市教育委員会)

長岡百穴古墳は、栃木県中部の宇都宮市長岡町に所在する。昭和三〇年七月二六日に栃木県の指定文化財に指定された。

栃木県内の横穴墓は長岡百穴古墳を除くと、県の北東部を流れる那珂川とその支流の荒川流域、それに接した芳賀郡北部の小貝川流域とその流域の地域に限られ、栃木県中部の田川流域としては唯一のものである。

長岡百穴古墳は、宇都宮丘陵と呼ばれる丘陵の岩盤を形成する砂質凝灰岩に掘られた横穴墓で、大きく二群に分かれ、西群八基、東群四四基、合わせて五二基あり、ほぼ三段に掘り込まれ、そのすべてが南側に開口している。

横穴墓の基本的な平面形は、玄門げんもんをはさんで、玄室が羽子板形、前庭部がハ字形又は台形状で、断面はアーチ形を呈する。玄室の規模は、長さ約一・一m、幅約〇・九m、高さ約〇・六mのものが

一般的である。玄門は、長方形に掘られ、その外側には、扉石をはめ込んだと思われる切込みの跡が残っているものがある。床面には排水溝が掘られており、その形態によって①床面の排水溝が無いもの、②排水溝が主軸に並行して前庭部まで伸びるもの、③排水溝が主軸に直行するもの、④排水溝がT字形になるものの4つに分類することができる。

築造時期は出土遺物が無いため不明であるが、県内の他の横穴墓と同様に七世紀代に造られたものと考えられる。

尚、現在、横穴の奥壁を見ると仏像が彫られているが、これは室町時代に作られたものである。

本横穴墓の周辺の丘陵上には多くの横穴式石室を持った後期古墳が所在する。特に、谷を挟んだ対岸の丘陵上には、前方後円墳一基、円墳四一基からなる瓦塚古墳群かわらづかが所在し、本横穴墓との関連が注目される。この古墳群は、六世紀後半に前方後円墳である瓦塚古墳(墳長四五m)が造られ、その後、七世紀前半の二六号墳(直径四〇m)まで継続して中小の円墳が造られた。七世紀前半の時



長岡百穴古墳



横穴墓の分布図



横穴墓実測図

期に瓦塚古墳群と長岡百穴古墳が併存することから、両者の被葬者には性格の違いがあると考えられ、造営集団差や階層差など諸説ある。これらの人々のムラがどこかはつきりしないが、丘陵を越えた西方約1kmに位置する北の前・前田遺跡が古墳時代後期～平安時代にかけての集落跡であることから、同時代の遺跡として注目される。



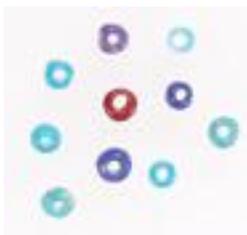
上ノ内貝塚からは、オオツタノハ (写真左) やユキノシタ (写真右) という貝で作られた、縄文時代のアクセサリーが出土しました。



鷹ノ巣遺跡第1次調査では、第26号住居跡から弥生時代後期の特徴を持つ土器(十王台式土器)と古墳時代前期の特徴を持つ土器が、いっしょに出土しました。これは、弥生時代から古墳時代への移り変わりを知ることができる、たいへん貴重な例となりました。



、弥生時代後期と奈良時代で、一辺が8~9mの超大型の住居跡が確認されています。これは、同時代のものとしては市内で初となるガラス小玉が58点出土しました。また、これは、虎塚古墳の文様にも使われている、赤色顔料のベンガラが詰まった小型の壺が出土しました。奈良時代の住居跡からは、「山田文マ子夜児」という文字が刻まれた瓦が見つかりました。これは、「山田」という場所の、「文部」の「子夜児」という人物の名前と考えられます。



約800年前

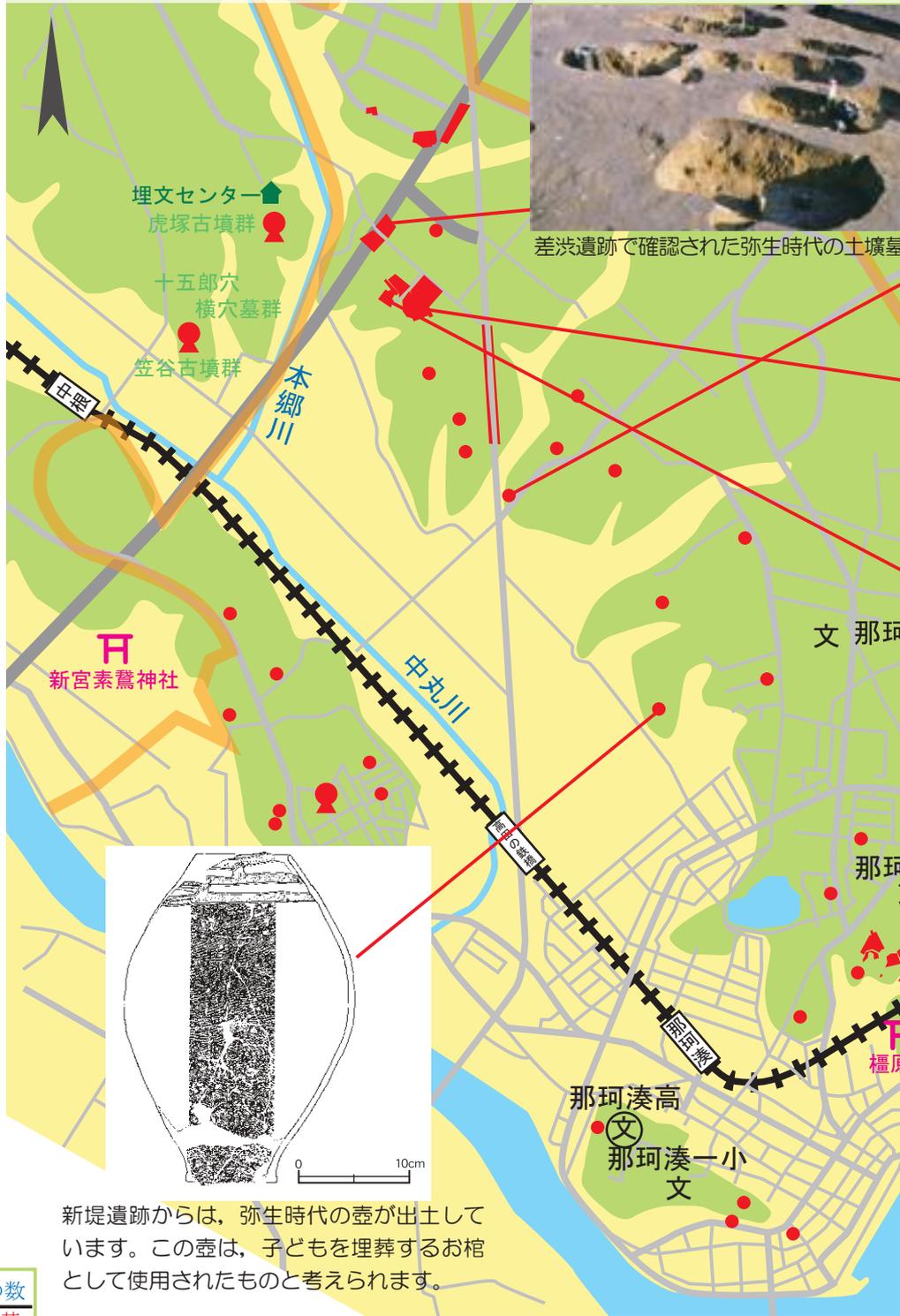
平安時代



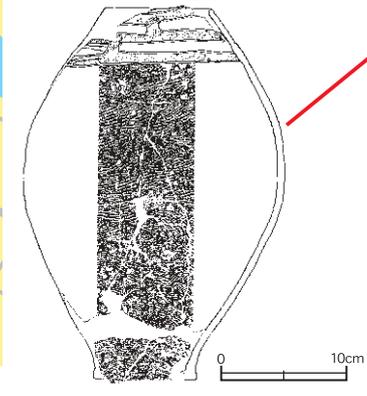
ひたちなか市の遺跡 5 (那珂湊中)

那珂湊中学区には、現在、77 の遺跡がみつかっています。今回紹介する那珂湊第三小学区には、35 の遺跡があります。この中には、旧石器時代の部田野西原遺跡、縄文時代の上ノ内貝塚や宮前貝塚、弥生時代の差渋遺跡、古墳～平安時代の鷹ノ巣遺跡や部田野山崎 I・II 遺跡といった各時代の遺跡が存在しています。

遺跡の発掘調査は、2018 年までに 32 回実施されており、弥生～平安時代の住居跡 183 基が確認されました。大規模な調査例として、1993 年に、ひたちなかインターチェンジの建設に伴って調査された差渋遺跡では、弥生時代のお墓である土壙墓が 32 基が確認されました。また、差渋遺跡のすぐ南側にあります鷹ノ巣遺跡では、1992・2005・2012・2016 年度に調査が実施され、弥生時代から平安時代にかけての住居跡が 87 基確認されています。住居跡からは、弥生時代のガラス小玉や奈良時代の文字が刻まれた瓦など貴重な遺物が出土しています。



差渋遺跡で確認された弥生時代の土壙墓



新堤遺跡からは、弥生時代の壺が出土しています。この壺は、子どもを埋葬するお棺として使用されたものと考えられます。

2018 年までに発掘調査された住居跡の数
183 基

2018 年までに発掘調査された遺跡 (地図上の●印)
三小地区: 神敷台遺跡, 鍛冶屋窪遺跡, 田宮原 I 遺跡, 小谷金遺跡, 上ノ内貝塚, 上ノ内遺跡, 鷹ノ巣遺跡, 差渋遺跡, 部田野貉 III 遺跡, 山崎遺跡, 赤坂遺跡, 宮前貝塚, 宮後遺跡, 部田野西原遺跡, 尼ヶ柵遺跡, 新堤遺跡, 部田野山崎 I 遺跡, 部田野山崎 II 遺跡, 部田野西富士山遺跡

鷹ノ巣遺跡第 2 次調査ではその弥生時代の住居跡から古墳時代後期の住居跡から土しています。さらに、奈この文字は場所と名前を示



大学時代はさまざまな分野に興味があった。それは現在でも続いている。

大学二年の一九六七年夏、国文学者で教授の臼田甚五郎先生うすだしんごろうが顧問の民俗学研究会（正確ではない）が、津軽地方の民俗調査をすることを同級生から聞き、その調査に参加させて貰った。調査地金木（現青森県五所川原市）へは、大津港駅から青森駅行の鈍行に乗り、五所川原駅で乗り換え、金木駅へ。宿舎となった旅館は太宰治の生家斜陽館近くで、参加者は一〇名ほどだったと記憶している。我々は三人ほどのグループに分かれてあちこちの民家を訪ね、年中行事や伝説などを聞き歩いた。村はずれの小さな寺の前の高い木に「虫おくり」の虫（藁製の龍）がくくられているのを発見。お堂の中にいた老婆達に、盆踊り唄「ナニヤドヤラヨ」や盆踊りを教わり、津軽の暑い夏を感じた。調査を終えると参加していた成田先輩の実家田舎館村へ移動し、初めてイタコの口寄せを体験。臼田先生は性別と命日だけを伝え、恩師である折口信夫先生の口寄せを依頼した。イタコは梓弓あすなゆみをピンピンと弾き、周りには茶碗などを敲たたけと命じて一体化させ、「お前は教え子の中では出来が悪く…」と語り出した。臼田先生は口寄せが終わってから「体が震えるくらい驚いた。まるで折口先生のようにだった。」と興奮気味に話されたのが印象的だった。田舎館からの帰路、私は参加者と別れて木造町（現つがる市）で資料館や亀ヶ岡遺跡を訪ねた。資料館では木製棚の中にあつたあの有名な遮光器しやくこうき土

私的茨城考古学外史—遺跡・人 出会いと別れ—

第2回 発掘三昧への道 序章

プロフィール

1948（昭和23）年茨城県多賀郡関本村生まれ。國學院大學史学科卒。1977（昭和52）年より2008（平成20）年まで、茨城県教育財団・茨城県立歴史館勤務。現在、茨城キリスト教大学非常勤講師、高萩市歴史民俗資料館館長兼文化財専門員、茨城県考古学協会会長。／主な著作「茨城の土偶」『東国の土偶』等。



瓦吹 堅

偶を見学し、その後遺跡を回った。遺跡近くの小川では赤漆が塗られた小さな土器片を発見。その土器片は今でも家の中にあると思うが現在行方不明。

木造町から八戸市の是川遺跡見学のため三戸町の伯父宅を訪問。翌日、高校三年生の従妹が八戸市内を案内してくれた。従妹との会話の中に「オシヨシイ」という言葉が何度か出てきたので尋ねると、「はずかしい」という意味だという。父は茨城で生まれたが五戸町で育ち、母も五戸町生まれなので、幼い頃から南部弁を聞いていた。それでも柔らかい抑揚のある従妹のイントネーションと「オシヨシイ」はとても新鮮だった。

次の日、三戸町から八戸市に向かい、八戸市では川行きのバスに乗り換えた。是川遺跡は、大正年間泉山兄弟によって発見・調査され、出土品は私費によって保存されてきた。私が訪ねた一九六七年には、土器や木製品などの出土遺物は木造建物の中の棚に雑然と並べられていた。見学の後、展示室の外で老人から声を掛けられた。聞き慣れた南部弁なので意味は判り、「何処から来たのか」との質問だった。かなりの高齢で、話しているうちは川遺跡発見者の一人泉山斐次郎翁いずみやまあやじろうであることを知った。斐次郎翁は杖をついて歩いておられ、会話の中でよく慶應義塾大学の江坂輝弥えさかてるや先生の名が出た。（つづく）



平成十八年から始まったワンケース・ミュージアムは、今回でなんと五十回目となりました。そんな五十回目のテーマは、奈良時代の瓦を焼く窯から出土した、文字瓦です。ひたちなか市では足崎に所在する、原の寺瓦窯跡群と奥山瓦窯跡が瓦を焼いていた窯として知られています。この両遺跡から出土する瓦の中には、文字が書かれた瓦が多くあります。私たちは、その文字が書かれた瓦を「文字瓦」と呼び、当時の窯業生産の体制や情勢を知る手がかりの一つとして扱っています。

様々な種類の文字瓦

瓦に書かれた文字には、生産された時期や場所によって違いがあり、文字の書かれた意図も変わってきます。例えば、瓦の製作を記念して年号や作者を記す。製作した工房名や管轄する役所など、生産場所と供給場所を記す。瓦製作

を負担した土地や人の名前を記す、などがあります。

ひたちなか市内から出土した文字瓦は、主に地名や集団名です。「津田」「岡田」は、瓦製作を負担した土地からの発注を、工房で識別するために書かれたものと考えられています。「清水矢作マ」「弓作」は武器生産に従事していた集団名で、当時の税である雑徭の代わりに、瓦工人への食糧などを納めていたために、記名されたのではないかと想定されています。

これらの文字の意味は諸説あり、また出土した瓦も完全な形をした物が少なく、文字瓦の全貌が明らかではないため、今後の研究に大きく期待されます。

文字瓦の記名方法

現代でも様々な文房具があるように、瓦に文字を書く方法にも種類があります。例えば、先の尖った棒状の道具で書くへら書き。押印という文字の彫られたスタンプを押す方法。直接指で書く方法。また、瓦が焼きあがった後に、墨で文字を書くこともあります。

市内の文字瓦は主に、へら書きか押印で書かれ、わずかに指を使ったものがあります。押印が押捺された形は、「*」のようにみえ、この押印が示す形の意味は、まだ詳しく解明されていません。この形は、よく見ると「傷」があることが分かります。「傷」とは、この押印を使用して

いるうちに、欠けたり削れてしまったりと摩耗していき、その状態のまま瓦に使用し、摩耗した部分が瓦にも反映されてしまったものです。よく見ると、傷がないもの、一カ所にあるもの、二カ所に傷があるものと、三通りあることが分かります。この痕跡から、使用しているうちに傷が一つ二つと増えていったという、経過を知ることが出来ます。また、この押印は形の端まで、きれいに押されていないものがほとんどで、それが端が摩耗してなくなつたのか、力を均等に込めて押していないのか、どちらかと考えられます。摩耗していたとすると、必ずきれいな状態の押印を使用していた瓦が出土する窯があるはずですが、どこかに、まだ発見されていない窯跡が、あるのかもしれないかもしれません。(田中美馨)



展示の様子

参考文献 川口武彦 二〇〇九「ひたちなか市原の寺瓦窯跡群・奥山瓦窯跡出土の文字瓦―記録内容の再検討を中心として―」『常総台地16』常総台地研究会

いそぎひがし

磯崎東古墳群出土の玉類

奈良女子大学 大賀 克彦



磯崎小学校敷地内第1号石室

磯崎東古墳群は、ひたちなか市磯崎地内に位置する古墳群で、50基以上の古墳が群集しています。現在までに10回以上の発掘調査を実施し、大刀や鏡などたくさんの遺物が出土しました。今回の報告では、1990年度の第2次調査と2011年度の第9次調査で出土したガラス小玉などの玉類を対象として分析を実施しました。その結果、時期や玉組成における特徴などが判明しました。

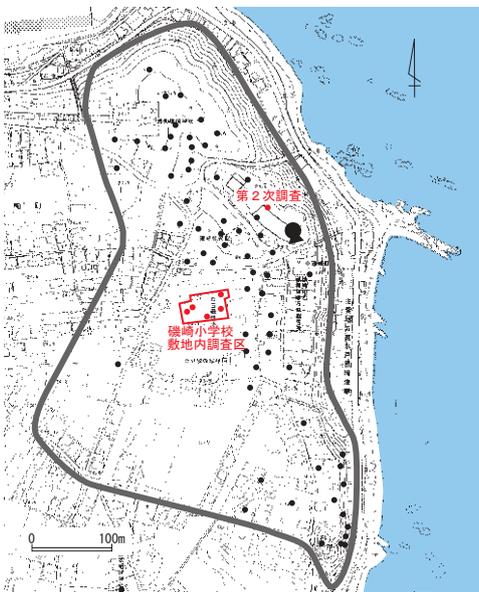


図1 磯崎東古墳群古墳分布図

はじめに
ひたちなか市磯崎東古墳群は、太平洋に向かって突き出した岬に所在する(図一)。立地が文字通りの海岸であることから、造営集団の性格が注目されている。これまで複数回の発掘調査が行われており、古墳時代後期の群集墳と、その周辺に散在する石室墓や箱式石棺墓が検出されている。既調査事例の中には大型の古墳や副葬品が豊富な古墳は含まれていないが、若干の玉類や鉄器の副葬が一般的に認められる。玉類の副葬は、第二次調査で検出された箱式石棺墓のうち東側のもの(図三)、第九次調査として磯崎小学校敷地内で検出された一号墳および一号石室(図四)の計三基の古墳において確認されている。このたび、出土した玉類を網羅的に調査する機会を得たことから、その結果を報告する。



図3 第2次調査東棺

一 出土した玉類の概要
①第二次調査の箱式石棺墓
第二次調査で検出された二基の箱式石棺墓のうち、東側の一基からガラス小玉が約五〇点出土した(茨城県教育委員会一九九三)。現在は、四十七点分を確認することができ(図二)。すべて中空のガラス管を切断し、加熱成型で丸味をつけて仕上げるという引き伸ばし法で製作されている。このような大量生産に適した製作技法は古代の日本列島には受容されず、出土したガラス小玉はすべて列島外部からの輸入品である。ガラス小玉は、コバルトで着色された紺色を呈するもの一〇点と、銅で着色された青色系の色調を呈するもの三十七点に区分できる。肉眼観察からの推定であるが、前者は、一点以外、植物灰タイプ



図2 第2次調査東棺出土ガラス小玉の一部

と呼称しているソーダガラス製である。西アジアもしくは中央アジアで製造され、主に陸のシルクロードを経由して輸入された。後者はすべて高アルミナタイプと呼称しているソーダガラス製である。東南アジア周辺で製造されたものが、主に海のシルクロードを経由して輸入された。

②磯崎小学校敷地内一号墳

横穴式石室を埋葬施設とする円墳である（稲田二〇一七）。現在、整理中のため変動する可能性もあるが、実見では瑪瑙製の勾玉九点（図五）、土製丸玉十四点、ガラス小玉三十八点（図四）が確認できた。瑪瑙製勾玉はすべて片面から穿孔

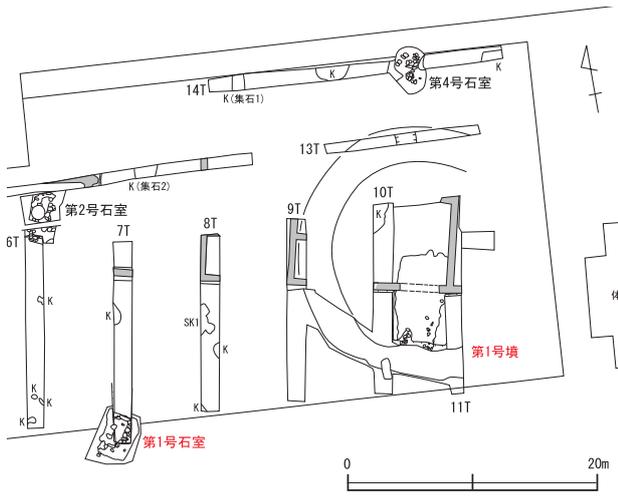


図4 磯崎小学校敷地内第1号墳と第1号石室確認状況図



図5 磯崎小学校敷地内1号墳出土の勾玉

されており、形状的な特徴から山陰地域、特に現在の松江市周辺の玉作遺跡で製作されたことが判る。土製丸玉は二種類あり、ドーナツ状の丸味を持った七点と、臼状の円筒形を呈する七点に区分される。後者は連玉状に製作された個体が中心で、表面の黒色処理も丁寧である。ガラス小玉のうち、引き伸ばし法で製作された二十点は、一点がカリガラス製であると推定される以外、すべて高アルミナタイプのソーダガラス製である。銅で着色された青色系の色調を

呈するものの中に、一点だけ黄色不透明を呈するものが含まれる。この色調は、錫酸鉛と呼称される人工的に合成して製造された顔料を、ガラス中に混和して実現されている。また、高アルミナタイプのソーダガラスの着色に使用される錫酸鉛の鉛原料は、タイの鉾山で産出したものであることが知られている。

他の十八点のガラス小玉も、引き伸ばし法に類似した技法で製作されているが、やや扁平で、片方の小口面のみが丸味を持つ上下非対称で特徴的な形状を呈する。ガラス管を切断した後の整形方法が異なるものと考えられ、変則的な引き伸ばし法と呼称して区別しているが（大賀二〇一〇）、詳細は今後の課題である。コバルトで着色された紺色を呈する。材質は植物灰タイプのソーダガラス製で、西アジアもしくは中央アジアで製造された。

③磯崎小学校敷地内一号石室

周溝を伴わない横穴式石室である（稲田二〇一七）。実見では水晶製の切子玉八点、蛇紋岩製の丸玉十三点（図六）と、多数のガラス小玉が出土している。ガラス小玉は破片を多く含むことから総数は明確ではないが、二六〇点分以上は存在すると推定される。形状や穿孔方法の特徴と分布状況から水晶製切子玉は山陰地域、蛇紋岩製丸玉は静岡県周辺で製作されたもの（戸根二〇〇八）と考えられる。

ガラス小玉は、種類が判断できたもののうち、九割以上が鑄型（図七）を利用して製作されている。ただし、古墳時代の日本列島においては、未加工の素材ガラスはほとんど存在しておらず、完成品の玉が原料としては利用されたことになる。そのため、鑄型を用いた加工は純粹な製作技法の一種というよりも、欠損品を再生するための技法であったと評価すべきである。鑄



図6 磯崎小学校敷地内1号石室出土の丸玉

型で再生されたガラス小玉の一点は風化の影響が顕著で、白色化していた（図八）。この個体に関してはさらに詳細な調査を行っており、結果は次章で述べる。他の種類は一号墳等と基本的に共通している。変則的な引き伸ばし法で作された紺色を呈するものも八点含まれる。

二 ガラス小玉の材質調査

磯崎小学校敷地内1号石室から出土したガラス小玉の一点は、風化の影響で白色化している。このことから、他の個体とは異なり、材質が鉛ガラスであると推定された。

鉛ガラスは古墳時代後期末に出現し、北部九州を中心として一定の流通量が認められる。た



図7 埼玉県薬師堂東遺跡出土のガラス小玉鑄型

だし、鉛ガラス製の小玉は巻き付け法で製作されたものがほとんどで、鑄型を用いて再生されたものは多くない。管見では、まとまった量で出土したのは東京都世田谷区に所在する殿山^{とのやま}



図9 殿山13号横穴墓出土のガラス小玉



図8 鉛ガラス製の鑄型造ガラス小玉

表1 鉛同位体比の分析結果

	$^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$	$^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$	$^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	$^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$
No. 1-43 (個体番号)	0.8992	2.2399	17.344	15.595
測定精度	± 0.0003	± 0.0006	± 0.010	± 0.010

十三号横穴墓(図九)および西谷戸A二号横穴墓が知られるに過ぎない。一方で、これまでに最多の鑄型が出土した埼玉県蕨市東遺跡では、原料として鉛ガラスが主体的に利用されていることが確認された(田村二〇一九)。このように、鉛ガラスを原料とする鑄型玉の流通には不整合な点が多い。そこで、基礎的なデータを蓄積するために詳細な調査を行った。

材質に関しては、風化の影響が大きいが、ほぼ純粋な鉛ガラスであった可能性が高い。材質が異なるガラスの混合を窺わせる証拠は得られなかった。また、類例のほとんどは銅で着色された緑色を呈するが、本例に関しては着色成分も検出できなかった。風化のために溶脱した可能性がある。

次に、鉛原料の産地を検討するため、鉛同位体比の測定を行った。結果は表一の通りである。また、関連資料と比較した結果は図一〇に示す。領域Pと呼称している半直線上の、端点付近にプロットされる。領域Pは朝鮮半島の百済産の鉛ガラス製品が集中する領域で、日本列島の古墳から出土するガラス小玉も、多くは領域Pに帰属する鉛同

位体比を持つ。また、蕨市東遺跡出土の鑄型に残存するガラス片の鉛同位体比も領域Pに属する(田村二〇一九)。

以上の検討から、磯崎東古墳群出土例は百済産の鉛ガラス製小玉を原料として再生されたもので、蕨市東遺跡において加工された可能性も否定できないことが確認できた。他遺跡の出土例に関しても、調査を継続する予定である。

三 玉組成における特徴

古墳に副葬される玉の組成はさまざまである。しかし、時期や地域、もしくは階層的な位置付けに規定されて、一定の共通性も認められる。

本稿において対象とした三基の古墳に関しては、まず、一定の時間差が認められる。すなわち、磯崎小学校敷地内の調査で検出された二基に関しては、変則的な引き伸ばし法で製作されたガラス小玉や蛇紋岩製丸玉など、後期末に新出する要素を含むのに対して、第二次調査の箱式石棺墓では全く組成しない。この点から、第二次調査の箱式石棺墓の方が時期的に先行することが判る。さらに、この箱式石棺墓から出土したガラス小玉には、鑄型で再生されたものを含まない。東日本では後期後半以降に鑄型で再生されたガラス小玉の比率が激増し、八割程度に達することから、この箱式石棺墓は後期前半に比定される可能性が高い。後期末以降以降に降る

領域P

領域c

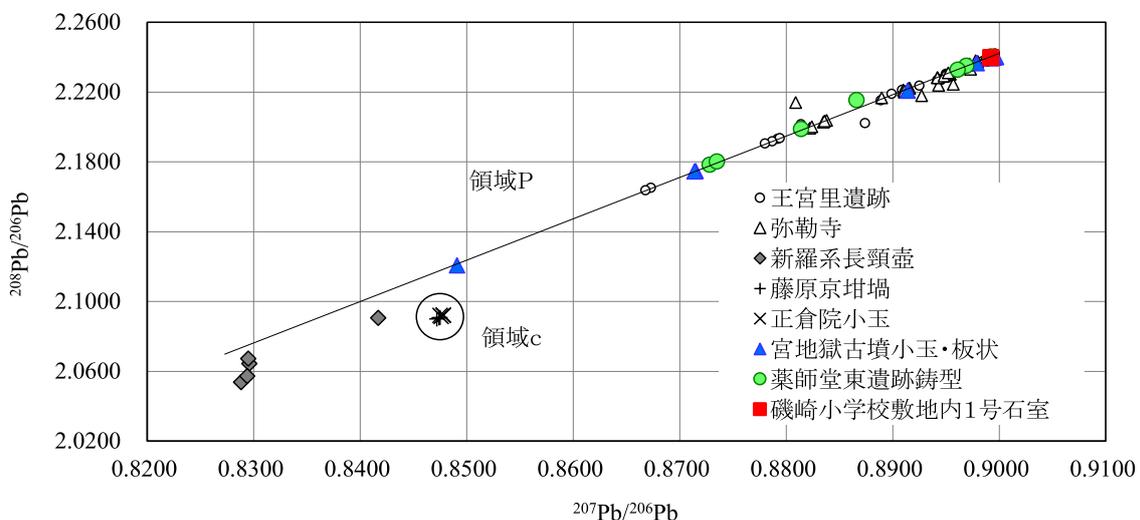


図10 各種の鉛ガラス製品に関する鉛同位体比の比較

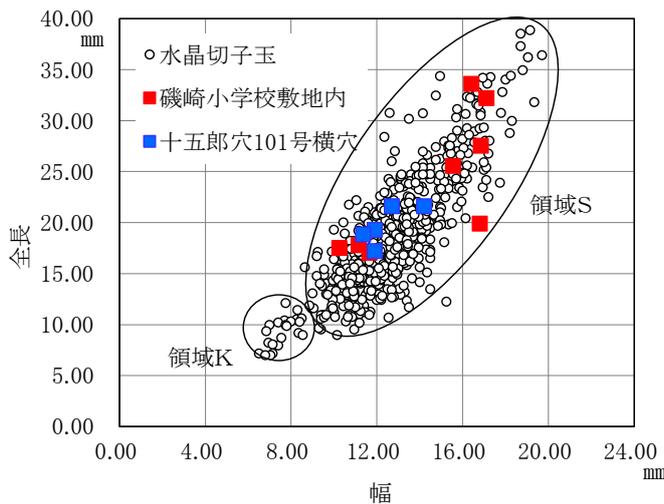


図 11 水晶製切子玉の形状変化

磯崎小学校敷地内の二基とは、比較的大きな時期差が認められる。

一方、磯崎小学校敷地内の調査で検出された二基からは、ともに変則的な引き伸ばし法で作されたガラス小玉が出土している。しかし、一号墳例は製作された時の形状を保持しているのに対して、一号石室例は小口部分が明確に研磨されており、入手からの一定の時間経過が見込まれる。すなわち、この二基の間では、一号石室が後出する。

ただし、出土した山陰系の玉類からは、もう少し複雑な状況を読み取ることができる。一号

墳出土の瑪瑙製勾玉のうち二点（S四およびS八）は、他より胴部が間延びした縦長な形状を呈する。すなわち、他の七点より製作時期が新しいもので、山陰系の勾玉の形状変化においては最終段階に位置付けられる可能性が高い（大賀二〇〇九）。一方、一号石室の水晶製切子玉は大きさの相違が大きい（図一一）。山陰地域における水晶製切子玉（図一一の領域S）の製作は後期中葉に開始され、当初は幅と高さが一センチ前後の小型品であったのが、時期が降るとともに大型で、スマートな形状に変化する（大賀二〇〇九）。一号石室からは出現直後のものと、大型化が最も進行した段階のものが混在する。すなわち、山陰系の玉類に関しては、最も新しい時期に製作された玉がともに出土していることになり、ガラス小玉の様相差を考慮すると、一号墳から出土した新相の勾玉は追葬に伴うものと推定される。

以上のように、本稿で対象とした磯崎東古墳群の三基の古墳は一定の時間差を認めることができるが、いずれも当該地域において標準的な組成を示す。また、同じ種類の玉に関しても製作時期が異なるものが混在することや、副葬までに一定の使用期間が見込まれる玉類が含まれる一方で、倭王権が配布に関与したと考えられる種類が含まれないことは、被葬者が王権と直接的な関係を持つような立場ではなかったことを示している。

結語

磯崎東古墳群から出土した玉類について、これまで得られた知見を紹介した。今後は、周辺地域の資料との比較などを進め、地域的な特質や古墳の築造と玉類の生産や副葬との因果関係についても検討を行いたいと思う。

謝辞

ひたちなか市埋蔵文化財調査センターの稲田健一氏には、玉類の調査と本稿の執筆について格別の御配慮を賜りました。末尾になりましたが、厚く御礼申し上げます。

参考文献

- 稲田健一 二〇一七「ひたちなか市磯崎東古墳群の調査」『二〇一七・二〇一八「ひたちなか埋文だより」』第四十六号
- 稲田健一 二〇一八「磯崎東古墳群②」『ひたちなか埋文だより』第四十九号
- 茨城県教育委員会 一九九三『茨城県遺跡・古墳発掘調査報告書Ⅶ』
- 大賀克彦 二〇〇九「山陰系玉類の基礎的研究」『出雲玉作の特質に関する研究』
- 大賀克彦 二〇一〇「群集墳築造の二つの契機」『遠山昭登君追悼考古学論集 遠古登攀』
- 田村朋美 二〇一九「薬師堂東遺跡C地点出土のガラス小玉の鋳型および鋳型付着ガラスの自然科学的調査」『薬師堂東遺跡Ⅱ（C地点）』『本庄市埋蔵文化財調査報告書』第五十八集
- 戸根比呂子 二〇〇八「東海系」の玉の流通」『玉文化』第五号

文 埋 センターの 日々 2019 後期

10月

1-8 松原遺跡試掘調査 / 9-31 向野A遺跡本調査 / 12 臨時休館 / ふるさと考古学⑦「さわって楽しい考古学」(台風19号の影響により中止) ↓



20 ふるさと考古学⑧「ロリミッドをつくらう」(講師・三井猛氏 梅田由子氏) / 26 ワンケースミュージアム50「瓦に書かれた文字開始」 / 中根ときわ会虎塚古墳除草作業 / 27 ひたちなかめぐりウォーキング見学 / 28 中根小学校1年生ドングリ拾い / 29-30 勝田三中2年生職場体験 / 31 虎塚古墳一般公開 / 那珂市菅谷西小学校6年生社会科見学(下段右端写真) / 中根小学校6年生社会科見学 / 『埋文だより』第51号発行

11月

1 磯崎小学校6年生社会科見学 / 阿字ヶ浦小学校6年生社会科見学 / 三反田小学校6年生社会科見学 / 毎日旅行社見学 / 1-4 虎塚古墳一般公開 / 3 出前授業(堀口小学校ふれあい祭り) ↓



6 日立市郷土博物館特別展「長者山遺跡がつなぐ古代の道と常陸国風土記の世界」へ資料貸出(十五郎穴横穴墓群須恵器杯ほか) ↓



黒澤響氏(茨城大学生)資料調査(馬渡埴輪製作遺跡埴輪)(下段右端写真)



7-9 三反田新堀遺跡試掘調査 / 8 毎日旅行社見学 / 8-10 虎塚古墳一般公開 / 9 ふるさと考古学ふるさと考古学⑨「虎塚古墳の秘密!?!」(講師・さかいひろ二氏 稲田健一) / 10 ふるさと考古学ふるさと考古学⑩「虎塚古墳の秘密!?!」(講師・鈴木康二氏) ↓



24 ふるさと考古学⑪「フィールド探検」(講師・矢野徳也氏) ↓



26 寄居新田古墳群試掘調査開始 / 27 三反田古墳群試掘調査開始

虎塚古墳 花便り

24 ウメ

今回ご紹介する花は、埋蔵文化財調査センターの入口にあるウメ(紅梅)です。ウメはバラ科サククラ属の落葉高木です。花は、早春の二〜三月に、葉に先立って咲きます。花の色は通常は白色。花弁は五枚、雌しべは二つ、雄しべは多数あります。名前の由来は、中国語の梅(メイ)から転化して、ウメとなったという説が有力です。花の後は、サククラの花が終わる頃に葉が茂ります。その頃にウメの実はすでに大きくなっています。

センターのウメの木は、新年最初に出会う花です。なので私は毎年新年が始まるとこのウメの木を観察して、花が咲いたのを見て春の訪れを感じています。そして、そっと花に近づいて香りを楽しんでみます。ウメの花が終わると、サククラの季節となり、春の虎塚古墳壁画公開が始まります。

(稲田健一)



2020.1.30

